

家で看取ることの意味 - 家族にとっての在宅医療を考える

フリージャーナリストの藤井満さんの体験を掲載しています。

連載3回目です。

藤井さんの体験をまとめた本が11月発売になります。

ご夫婦で作ったホームページは「週刊レイザル新聞」

<http://reizaru.r-lab.info/>

■がんの毒を看取る 「ツボ押し」が救いに ③

肝臓の機能が落ちて、おしっこが出なくなり、全身がむくんでいました。おなかには水の入った袋のように膨らみ、台形になってふとんに張りついています。

病院では点滴で水分を補給していましたが、「点滴でむくんで苦しむ患者が多い。食べられなくなって自然に亡くなれば楽なのに」「肺に水がたまっておぼれて死ぬような患者さんが多かった」という友人の看護師の言葉を思い出し、病棟の看護師に点滴量を半分に減らすよう頼みました。

退院後のクリニックの医師は「水分を減らせばむくみは減る。のどが渴いたら氷を口に入れたらいいですよ」と点滴をやめました。

おなかが苦しくて、夜中は何度も目を覚まします。麻薬を増やせば眠るのだけど、できるだけ薬に頼りたくない。昭和の歌謡曲やアニメの歌を歌いながら、おならが出て楽になるまで腹をさすります。

マッサージの方法は気功やツボにくわしい知人Nさんに教えてもらっていました。Nさんには入院中から来てもらっていました。彼にみてもらった翌日は肝臓の数値が目に見えて改善し、体が楽になりました。偽薬でも治癒するというブラセボ効果かもしれないけれど、実際に楽になるのだからありがたい。そして、むくみや頭痛に効くツボ、腸のガスを出させるマッサージなどを教えてもらいました。

患者の家族は医療の知識がないから、医師の言葉にあたふたするばかりです。でもツボなどの知識があれば、自分の力で少しは病人の苦しみを減らすことができます。ツボの知識は無力感に負けないためにもとても役立ちました。さらに、「もうできる治療はありません」と医師から見放されたとき、代替医療は心の支えになってくれます。ただし、代替医療の治療効果は科学的には証明されていません。「〇〇でがんが治った」というものはほとんどがウソです。でも法外なカネを要求されないのであれば、症状をわずかも改善してくれて、一縷の希望を与えてくれる代替医療はアリだと思いました。

妻は退院後、「私は今死んだみたい。お母さんに伝えて」と自分が死んだと思っておむこが増えてきました。

9月21日の明け方には「顔ふきたい。タオルをチンして」と言います。体をふいたら「あー気持ちいい」。それから「常円寺に電話して」。妻の父が眠る東京の寺で、その寺の合祀墓に自分は入るつもりでした。

「まだ明け方やで」と言うと、

「はよせなアカンやん。もう死んだんだから」

「いつ死んだん？」

「顔ふいたからさっき。あれ？ きょう何日？」。21日だと答えると、

「なら22日に私は死ぬねん。通夜は23日、葬儀は24日や」

妻の顔をのぞき込むと僕の肩に手を置いて目を見つめ、

「あんた、いい連れ合いを見つけなさいよ。死んだらあかん。ミツルは新聞記者としてね！」

「あんたはレイザル新聞(妻のブログ)をやったからイラストライターか？」と尋ねると「私はアホなおばはんや」。

そして「神様にお願いがあるねん。ミツルの横に寝たい。

それから何か飲みものちょうだい！」と言って満面の笑みを浮かべました。

能登半島や島根、愛媛に住んでいたころの思い出を振り返り、

「私らはカモメ、どこにでも住むんや。でもカモメにポータブル(トイレ)は似合わないなあ」などとしゃべりつづけます。

2日後の明け方には結婚直前を思い出したのか、

「西宮にいるころ、星を見に行ったり、おうちさがしに行ったり

すてきな恋だったねえ」。むくんだ足をマッサージしていると

詩のような言葉を次々に紡ぎ出してくれました。

(つづく)